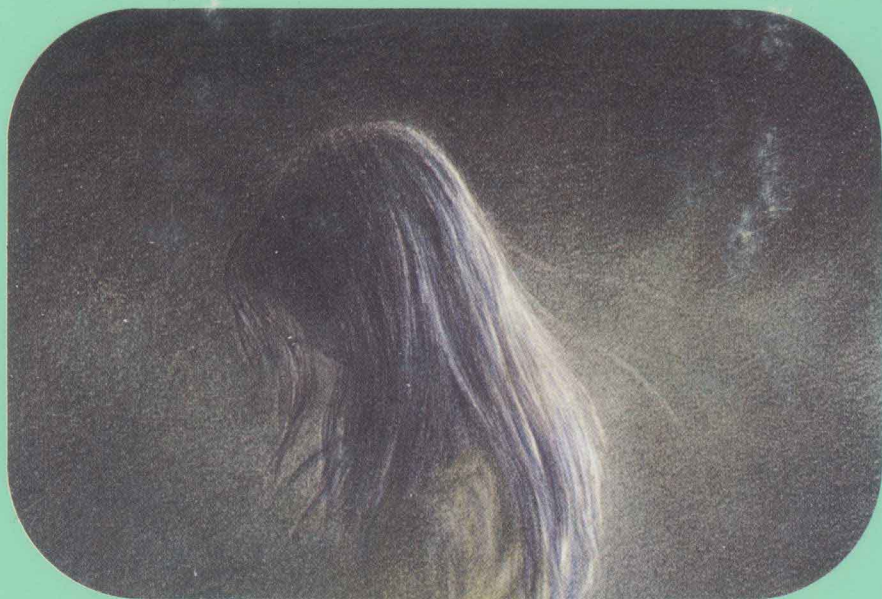


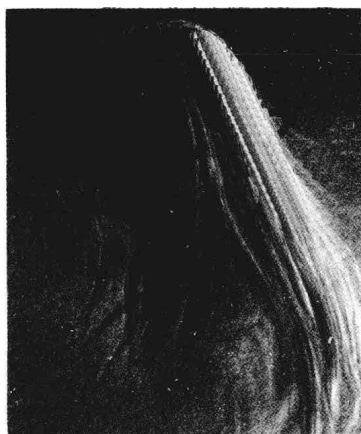
風のけはい

峰原緑子



風のけはい

峰原緑子



文藝春秋

風のけはい

昭和五十六年七月二十五日 第一刷

著者略歴

昭和三十六年十一月十四日、群馬県生れ。東京で育ち、現在、立正大学第二文学部国文科在学中。十七歳の時に書いて、応募した作品「夏のさなかに」で、一躍注目される。「ゆらり、と」は十八歳の時の作品。「風のけはい」で第52回文学界新人賞を十九歳で受賞する。

著者 峰原緑子 みねはら みどりこ

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三三三
電話代表(〇三)二六五―二二一

定価 八百八十円

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

© Midoriko Minehara 1981

Printed in Japan

装丁
味戸ケイコ

風のけはい

夏の
さな
かに

もうすぐ真夜中の十二時になる。真暗な部屋のなかで螢光塗料のついた時計の針だけが黄色く光っていた。

1

私は、そうつと物音をたてないようにして起きあがり、耳を澄まして家族が寝静まっていることを確認する。それから、ラジオのスイッチをいれて電気スタンドの小さなあかりをつける。その下に手鏡を置いて化粧をしていると、階段の下で柱時計が十二時を打つのが静かに聞こえてくる。ピンを口にくわえて髪をとかしながら窓に近づき、ガラス戸を開けて身のりだす。すぐ目の前の街灯は、もう何年もまえから割れたままなので外はただ真暗なだけ、なにも見えない。

突然、オートバイの走ってくる音が聞こえてくる。だんだん近くなり、家のそばの曲り角に止まって、大きくクラクションふたつ。

それが、いつもの合図だ。私は大急ぎで着がえて、素足でこっそり階段を下りて行く。玄関でサンダルを拾いあげて脇にかかえ、つまさきで外へ出る。ゆっくりとドアを閉めて、ひとつ大きく呼吸をする。弱い七月の風が私のからだの内に、すうっと流れ込んでくる。

サンダルをつっかけて、囲いもなく小さな家が両脇にびっしり建ち並んだ細い道をいそぐ。ぼんやりとした街灯のあかり近くで赤土が低く舞いあがる。

ひとつめの角をまがるとアキオがいた。オートバイのライトを私の方に向けて、大きなヘルメットをかぶり、Ｔシャツの袖を肩まで折り上げている。

「ひとりなの、ほかのみんなは？」

「走ってるうちに集まるだろう、今夜は久しぶりの集会なんだから」

私はバイクの後ろに乗って、アキオの胴のあたりに手をまわす。

「しっかりとつかまってるよ、ふり落とされるからな」

そう言うてからアキオはエンジンを何回かふかして、私たちの乗ったバイクは走りだす。

その瞬間、後ろに乗っている私のからだは、つよく後ろの方へ引っぱられる。あわてて私は重心を前にかけてアキオの背中にひたいをはりつける。

「おれ今日は寝不足なんだ、ゆうべ三時ごろ寝ただけど、なんかあれこれ思っているうちに目がさえちゃってね。なにをそんなに思ってたのかなあ、もうほんとに思い出せないんだけどさ」

アキオがしゃべりだす。私はアキオの背中で頭をころがすようにして聞こえないふりをする。私の頬が、アキオの背中の中の汗を感じとる。

「寝不足でもバイクに乗れば気分がいいんだ。だけど近ごろは警察の取締りが変に厳しくなってきた、ろくろく集会も開けないなんてなあ、もう七月、夏だぜ、こんなにじっとしてられないじゃないか、夏だぜ」

私はアキオの胸のあたりにまわした腕をゆるめて、うすいＴシャツの上からアキオの腹の脂肪をつまんでみる。

「ほらジュン、ちゃんとつかまってろよ、落ちても知らないぞ」

「落ちる時はアキオの腹の肉掴んだままいっしょなのよ」

「おれまだ十八だぜ、腹に肉なんかついてないさ」

バイクは、とつくに制限速度を越していた。そして、まばらに走る乗用車をつぎつぎに追いついていく。

黒っぽい闇の中で、いくつかの車のライトが揺れながら光っている。私はアキオの腹に食いつく指を離して、またいつものように両腕を回す。すこし前を走っていた派手なトラックを追いこす時、私はアキオの頸すじに出来たばかりの赤いニキビを見つける。

「ねえ、今夜は集会なんか出ないでさ、真夜中の国道、スピード出せるだけだして突っ走りたいの、バトカーが追ってきたってかまわないよ」

「それも悪くないね、だけど——」

ちょうど目の前で信号が赤になり、アキオはためらわずにそれを通りぬける。私は肩越しに遠くを見ると、まっすぐのびた道路から横にそれる登り坂がひとつ。見ているうちに、私たちの乗ったバイクはその坂を登りはじめている。

「あたし、坂道って好き」

「なんで？ ハンドル握ってる方は大変なんだけどな」

「理由なんてないわよ。坂をすごい速度で下りていく時ね、たくさん風とぶちあたるでしょ、その時わけのわからないにおいがして、あたし、それはきつと風のおいじゃないかと思うんだ」

「へえ、そうなの」とアキオが言う。たぶん無表情に言ったのだと私は思う。

私たちは広い土手にあがる。小石だらけの地面から白っぽい埃がたつて、乾いた頬にはりつく気がする。そして一瞬、呼吸を止める。

「もうずいぶん集まってるよ」

アキオが言う。見ると河川敷には数えきれない車のライトに照らされた若者たちがいた。どぎつく化粧した女たちや、どこかで見たような男たち。けれどどんなに真赤なルージユをひいたところでやはり、そこにたむろするたくさんさんの女たちは、夜明けと同時にそれぞれの日常へと帰っていくんだろうか。

そこまで考えて、私はふいに笑いだす。私はいったいなにを考えているんだろう。私だって明日の朝になれば紺のセーラー服を着てバス停に立つひとりの小娘でしかないのだ。

「ジュン、悪いけど今日はここにはいられないよ」

「なんで？」

「ちょっと顔見られたくないやつがいるんだ、おれは帰るけど、ジュンはどうする？」

「あたしも帰る。じゃ、かわりに荒川の土手に行こうよ、ここより少し狭いけどね」

バイクはぐるりと方向を変える。

鉄橋に一列の光が通り、よく見ると四両編成の私鉄電車が、ゆっくりと走り過ぎてゆく。もう本数も少なくなつて、たぶんあれが最終なのだろう。

ゆるい傾斜の荒川の土手に座つて、いくつもかかっている橋を流れる車の、赤やオレンジの光の粒を横目で追う。すると信号で流れは一時せきとめられ、ふと視線をおとすと、さつきから動くけはいのないアキオが、ちくちくささる短い草の中で横たわっている。

「眠ってるの？」

「眠れないよ」

土手のむこうから、ふらふらと歩き、よろめきながら、すこしずつ近づいてくる女が見える。しばらく眺めるうちにさらに距離も近づき、薄闇の中のシルエットだけでもその様子が

普通でないことに気づく。

これは私が下町に生まれ育ったせいなのか、私は小さな頃からたくさんの人達を見てきた。住宅や工場の密集した下町では見えないわけにはいかなかったのだけれど、その中には発狂した男や女、へらへら笑う白痴、ブツンと手足のちぎれた者などがひしめいていた。不思議なことに下町には身体障害者がやけに多い。プラスチック工場、メッキ工場、プレス工場、研磨工場、うるさいほどたち並ぶなか、プレス工場の男たちは、あっけなく指を落とした。小さな頃、手をひいて遊んでもらう時、私は二、三本ほどしか指のない手をべつだん奇妙なものとも思わなかったし、その指を握りしめて歩く下町が、私の世界のすべてだった。

「なんだ、あれ」

アキオは近づいてくる女を見てからだを起こして言う。

「こっちにくるよ」

私は、それが気違いなのだと思います、見ているうちに、なんだか訳のわからない胸さわぎがせまり、はっと気づいて目をみはる。鞠子だった。

鞠子は半年くらい前、ふらりと学校をやめていった。それが結婚したためだということ

知ったのはつい最近のことだ。

「鞠子だわ」

「ジュンの知り合い？」

アキオは意外そうに言う。

「少し前、同じクラスにいたの。でもあの子、急に学校やめちゃって、それっきりだったのよ」

私は立ちあがって鞠子の名前を呼びながら走り寄る。鞠子は私に気づくと、ふらふら動かしていた足を止め、両手にしっかりとかかえていた白っぽいものをごろりと地面に落として魂のぬけたようにすんとすわりこむ。

「鞠子でしょ、どうしたのよ、こんな時間にふらふら歩いて。氣イふれてんのかと思っちゃったじゃない、大きなおなかして、妊娠してるんだったら普段よりずっと氣をつけてなきゃならないのに」

彼女は放心したように、無表情に肩で息をするばかりだ。やがてつきはなしたように言う。

「もう産んだ、けどどあたしのお腹はへっこまないの、もう産んだのに、生まれた子供は泣

きもしない、ほら」

指さされた赤ん坊は、斜面をころげ、ちょうど見下ろす角度にあった。

「さっき部屋で産んだのよ、ヒロの帰りが遅くて先に寝てたらふっと目がさめて、敷布団が水びたしなの、破水してたのね。ものすごくおなかが痛くて痛くて、あ、生まれる、って感じたから、とにかく電話しなきゃと思ったんだけど、電話機のある所まで歩けないの。だってアパートの共同電話なんだから、それで回りの部屋の人に起きてもらおうと思って、床を這いながら大声をだそうとしたら、出ちゃったのよ、あっけなく頭がね。もうその時は死んでたわ。悲しいね、こんなのって。ほんとに、あたし、どうしたらいいんだろうって思ってるうちに、あの子をしっかりと抱いてここに来ちゃったのよ、とてもいたたまれなかった。でも、もう一歩も歩きたくない、痛いよ」

寝まきの浴衣の肩が落ち、巨大にふくれた乳房からは今にもぽとぽと乳がこぼれてきそうに見える。

私は斜面を下り、赤ん坊を手さぐりで拾いあげる。まだあたたかい。

「ここにいてもしょうがないよ。それに、からだも心配だし。もう帰ろう。アパートまで送